

漢字のパワー

桑原 正紀

短歌の推敲をしていて、ある言葉を漢字にするか平仮名にするか迷うことがよくある。迷ったときは平仮名にすればだいたい正解のことが多い。なかには平仮名を意図的に多用する場合もある。「コスモス」五月号の「展望」で金子智佐代さんが引用している作品をもう一度上げる。

さんぐわつじふいちにちにあらなくみちのくはサング
ワヅジファイヂニヂの儘なり 本田一弘『あらがね』
これなどは平仮名に加えてカタカナまで用い、「三月十一日」に対する被災地固有の思いを表出している。同じ五月号に、次のような作品もあった。

ゴミもやす炎のかたちしなやかにゆらぎをどりぬもえ
つきるまで 畠山参治 宮城

「炎」以外はすべてカタカナ・平仮名で表記することで、「炎」という漢字が際立ち、その形象にスポットが当たるようになっている。

一方で、タイトルに掲げたように、意図的に難解な漢字

を用いるケースもある。

人幾重組織幾層その奥に渠らおほるにて罪かがやけり
高野公彦『淡青』

この歌が発表された当初、「渠ら」という表記をめぐって歌壇で話題となったことを記憶している。たしか河野裕子さんなどは疑問を呈していた。「彼ら」でいいではないかというわけである。河野さんらしい感覚でそれも一理あると思ったが、私などは「渠」が持つ意味とその特異な字面が、いかにも顔の見えない巨悪の大親分を思わせて拔群の効果を上げていると感じたものだ。「巨魁」という語ももともとは「渠魁」と書いた。

このように、漢字も用い方によってはインパクトのある表記として利用できるのである。

最近驚いたり悩んだりしたケースを上げておこう。

満開の桜の木までつなぎゆく父の手鉞力屋なりし父の
手 新屋修一 兵庫（コスモス七月号）

尺蠖の動きにも似て水鉢の子はくるんくるんと遊ぶ
黒岡美江子 千葉（五月東京歌会詠草）

「鉞力」は「ブリキ」、「尺蠖」はルビがあるので読めるが、「尺取り虫」とすぐにはわからない。読めなくても、またわからなくても、読者が調べてその表記や語を選択した意図を納得してくれば成功ということだろう。調べる努力を放棄されることもあるのが怖い。